

双葉医療体制の確立への本学の立場

背景：

未曾有の原発事故による惨事を受けて、本学は県内における医療機関のセンターとして、そして“県立”という立場から、本県復興の要として、原発避難地域の医療の再建を本学の歴史的使命と捉える必要がある。

現状：

地域医療を支える柱である 1、2、3 次救急体制は、実質、崩壊している。また、放射能に対する風評、そして隣接地域の医療体制維持の過剰負荷（ハード、ソフト両面）は限界に来ている。

本学の立ち位置：

1. 歴史的使命としての位置付け

将来にわたって、双葉及び周辺地域の医療体制の確立を、本学の歴史的使命と位置付ける。

2. 目標（現地作業員と帰還住民の健康）の明確化と手段の分別

この事業の目標は、原発事故現場とその周辺で働いている人々、そして、帰還住民の健康（予防、医療、介護）を一体的に支える事である。その他は、全てこの目標を達成する為の手段である。

3. 大学全体での対応

この事業は、本学の一担当者や一組織の問題でなく、本学教職員が一体となって取り組む体制を整える必要がある。

4. 不確実性を前提とすること

今後、様々な情勢の変化が予想される。その変化の不確実さを考えると、組織や人員、予算はその時々事態に柔軟に対応できるように、県とも予めこの事に就いての認識の一致を諮っておく必要がある。また、その担保のためにも、県との役割分担や事業の実施形態を明確にする必要がある。

5. 柔軟性の確保・前例に囚われないこと

この事業の継続性を担保するには、あらゆる方面に支援や参加を求める必要がある。その為、組織及びその運営の在り方に就いては前例に囚われずに考える必要がある。

6. 学内の環境整備

本学が継続的にこの事案に取り組むためには、一部の教職員のみには使命感や志を押し付ける結果に陥る事のないようにする必要がある。その為には、余裕ある人員体制、短期の ON-OFF 勤務、個人・組織に「利」のある勤務条件を考える必要がある。

7. 短期・中長期での人材確保

短期的には、学内の所属医師が何らかの形でこの事業に参加する仕組みを作る。中長期的には、学内外からの人材招聘、育成を心掛ける。

8. 復興のシンボルとしての配慮

県立大野病院における整形外科の手術による死亡事故、産婦人科の出産に伴う死亡事故と刑事事件としての立件、そして、原発による避難という双葉地域の三重苦のなかで、当時の本学職員の心証を考えると、この事業がこの地域の復興のシンボルとなれるように、細心の注意を払い事業を進めていく必要がある。

9. 最終目標実現に向けた準備作業の並行

最終目標を立て、そこに向かって幾つかの段階を経ての充実を計る必要がある。その為には、早め早めに、次のステップに対する準備をしておく事が求められる。このことを、本学も県も自覚して作業を進めていく必要がある。

10. 段階的な貢献（前線基地設置、ローテーションによる貢献）

当面は、本学が前線基地を設け、そこで一旦受け止め、必要に応じて患者を迅速に本学へ送る、或いは、チームが基地へ急行する。この体制なら、全ての教職員が参加出来る可能性がある。将来は、ローテーションによる「病院」への貢献を視野に入れる。